

## 幻想叙事詩

打ち寄せる波しぶきのような曇り空であった  
私はひとりぼっちでおせんころがしに立って

きっと異<sup>ちが</sup>っていたらう彼女の時代の海の色を

稲藁のようにかさかさした、汚れた海の色を見つめていた  
崖下の牙をのぞいて私は途方にくれたが、その時  
軽いめまいが私の身体を泳がせた

私は空よりも青い湖から蒸気の如く立ち昇った

そして、可憐<sup>ひと</sup>な女にささやくことを思っていた

ところがその女はささやくより近く、私の前に立っていた  
「ボタンが違っているわよ」

私は、自分のと同じ高さにあるその茶色い目に  
己の音楽までも吸い込まれていった

私はホームから階段を下りていった

そして、私の前を歩いている人の足首を見ていた

暗い<sup>ていすい</sup>泥水の沁み込んだコンクリートを見ていた

せむしのような空間の重みが私の視線を支えていた  
そして、その足首を追って階段を下りきった私は  
もはやその重みによって押し潰され、消え失せてしまった

消えた<sup>プレリユード</sup>前奏曲は、再び<sup>かいむ</sup>海霧のようにやってきた

もの憂げな夏の<sup>ひかり</sup>陽光で静かに明るませながら・・・

私は広い埃の真ん中に立つことを怖れ  
ぽつんと隅のほうに、低い鉄棒に寄りかかっていた  
時は一粒毎にきらめいてはしたたる滴のように落ちていった  
私は或一条の光に導かれて上っていった

雲間からセロファンカーテンが垂れ下がる、ひとつまたひとつ  
その天幕の前を点の如きものが糸のようになびき、下りてくる  
小さな私は、それが自分を迎えに来る天馬だとは知らなかった  
それは次第次第に近づいてくるようには見えなかった

ところが、あと思った時、真直ぐ私にぶつかった  
小さな私は嬉々としてさらわれ、空へ舞い上がった

私の意思はその時、引いていたバネを放した・・・

過去はたぐり寄せるように、現在は強引に私を引き寄せた  
私は待ち続けたが、何も私を連れ去りはしなかった  
己の足で海を背に、歩き出さねばならなかった

(1982.3.7)